ゲッターロボΩ

（0M0）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲッターロボΩ

【Ｎコード】

Ｎ５２０８Ｖ

【作者名】

（０Ｍ０）

【あらすじ】

百鬼帝国との決戦からしばらくの時を経て、新たな研究所、新たなゲッターロボが誕生する――

鋭太、颯樹（そうき）、秀継…三人の少年よ、今こそ、三つの心を一つにせよ……！

ゲッターロボＧから分岐した、もう一つの物語。

鋭太（前書き）

ゲッター書いてみました。
一話なので多くは語りませんが、主人公は出るのでご安心を…

鋭太

――近未来、百鬼帝国との決戦から約三年…。
人類は、束の間の休息に身を委ね、平和に暮らしていた…
また、流竜馬、神隼人、車弁慶、早乙女ミチル他早乙女研究所の面々は、新たな脅威に備え、新たなゲッターを開発しようとしていた…。

――富士山麓・山梨側登山口―

「いやー、いい天気で良かったな～」
「ホントにね～、さ、頑張って歩きましょう。」
「よ～し、父さんについてこ～い！」
「「おー！」」

一組の家族が、富士山に登り始めた。
冒頭の少年は、守原鋭太、中学三年で冬には受験を控えている。
今は、その気分転換に、家族全員で山登りに来ている。
鋭太「ありがとう父さん。俺、夏山は初めてだよ。」父「そうだったな、じゃあ五合目位までだな。」
楽しげに歩いていた…しかし、何の因果かこの家族に…悪夢が降りかかった―
父「！？地震か」
母「うそ！？この前大きなやつが来たばっかりじゃない！」
父「余震か！？」
鋭太「いや、余震にしちゃ強すぎる…震源この下！？　何か来る！」

轟！という音と共にバッタを模したような二本足の化け物が現れた。
父母「！…鋭太！…」
長い手が…三人に襲いかかる――
親は…本能的に我が子を守るものである…
鋭太「がっ…はっ…父さん…母さん…！」
父「鋭太逃げろ！ぐあああああ…！」
母「きゃあああああ…！」
無惨に引きちぎられていく二人の体は…肉片となり、鋭太の前に降り注ぐ…
鋭太「あ…ああ…うわァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
鋭太は…走り、逃げることしか出来なかった。
一心不乱に、無我夢中に！
そして、ある建物に飛び込んだ…
？「ちょっと君！大丈夫！」
研究者風の女性が声をかける。歳は二十代半ばだろう
鋭太「ぜはあ…ぜはあ…ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
鋭太はまだ放心状態である。
？「ちょっと！落ち着いて！」
言い終わる前に、彼女の拳が飛ぶ。
鋭太「ぐはっ！？…はあはあ…ここは…」
？「ここ？ここは富士山麓ゲッター線研究実験所。私は所長の安宅鞠沙よ。」
ゲッター線研究実験所？鋭太は理解出来なかった。
ゲッター線研究所と言えば誰もが「早乙女研究所」を思い浮かべるだろうしかし、こんな所にゲッター線研究所があるなどおそらく誰も知らないだろう。
安宅「そんな顔しないでよ…知らなかったのは分かるけどさ。」

鋭太は、安宅博士の言葉にピクッとなる。

暫くすると助手風の男が報告にやってくる。
助手「所長、登山者はこの少年以外骨無しにやられました…」
安宅「やっぱりね…あなた、名前は？」
鋭太「守原…鋭太です…」
安宅「鋭太くんね。どうやってここへ？」
鋭太「父と母がバッタにやられて…必死で真っ直ぐ走ってきたらここに…」
安宅「真っ直ぐ…時間と距離からして…あなたアレが出たところにいたの？！」
鋭太「はい…真上に…」
安宅「あなた…よく生き残ったわね…」
安宅博士は呆れたような声で感心している…
そして…暫く考えて鋭太に一言言い放つ…
安宅「あなた、乗ってみない？」

鋭太は、安宅博士が何を言っているのか、理解できなかった。
安宅「そんな間抜け面しないで、新型のゲッターロボよ。」
―ゲッターロボ…それはかつて、恐竜帝国と百鬼帝国を滅ぼした、言わずと知れた合体変形ロボットであり、鋭太も少なからず憧れを持っていた。
鋭太「…俺が…ゲッターに…」
安宅「勿論、命の保証は無いわよ？」

鋭太は、自分でも分かるほど、心境はガタガタだ。しかし、もう自分のような人を出したくないと言うのも本音だった。

鋭太「…俺…やります。父さんと母さんの仇を…！」
安宅「理由はそれだけじゃないでしょ？」

鋭太「！…」
安宅「図星ね…でも、隠す必要はないわ。私達だって…思ってることは一緒だから。」
鋭太は安宅博士の言葉に、底知れぬ安心感を覚えた。

―富士山麓研究所、格納庫―
鋭太「……！ゲットマシン…！」
初めて生で見るゲットマシンに、鋭太は興奮を隠せなかった。
安宅「凄いものでしょ？完成まで１０年かかったのよ？」
鋭太「１０年…安宅博士って今おいく…」
安宅「女性に年を聞くの？（黒笑）」鋭太「すいませんでした！」
安宅「それじゃ、あなたにはあれに乗ってもらうわ。」
と、指さされたのは赤い機体…
鋭太「…イーグル号…」
安宅「違うわ…あれは『コンドル号』…」
鋭太「コンドル…あ、そういえばコイツの名前は？」

安宅「ゲッターロボΩ…」
鋭太「Ω…」

安宅「他の二機はパンサー号、ライノス号、合体形態はα、β、γよ…」
その時だった、基地内に警報が鳴り響く…！
安宅「何事？」
助手「骨無しが出ました！モニター出します。」
鋭太「！！」
安宅「鋭太くん？」

鋭太「…アイツだ…！アイツが父さんを…母さんを…！」
鋭太は怒りを露わにし、拳を握りしめる…
安宅「それでいいのよ…」
鋭太「え？」
安宅「ゲッターロボΩは、搭乗者のあらゆる感情を感知して強化されて、その意志が強ければ強いほど強力になるの…」
鋭太「なら、今の感情で戦えば…」
安宅「そうね。じゃあ、あなたにはこれ…」
安宅博士が渡したのは、黒いライダーヘルメットと、赤い戦闘服である
鋭太「これって、パイロットスーツ…ですよね？」
安宅「安心しなさい。強度は通常品の五倍にしたうえで軽量化してあるから。」
安宅博士は遠回しに言っているが、鋭太には分かる…、ゲッター線には、物質を有り得ない方法で変化させたり、質量を変えたり出来ることを…

鋭太とて、ゲッター線が危険なものである事は重々承知だ。だからこそ、このヘルメットと戦闘服を身に纏うことに抵抗が無いといえば嘘になる。
しかし、今の鋭太は、そんな事のために今更降りるなど出来はしない。

鋭太「…いきます…！」
安宅「分かったわ。総員、第一戦闘配置！ゲットマシン、発進シーケンス！」
オペレーター「ハッチオープン。進路オールグリーン。ゲットマシン、発進位置へ。」

安宅「鋭太くん、パンサーとライノスはオートパイロットにしてあるけど、あなたの操作でマニュアルに替えてもいいわ。」
鋭太「了解です。」
オペレーター「ゲットマシン、発進どうぞ！」
鋭太「コンドル号！発進！」
オペレーター「パンサー、ライノス、射出どうぞ！」

大空高く飛び出したゲットマシン、コンドル、パンサー、ライノス…。

その内、人の心を宿すは一つ…。
仇討ち…守護…様々な思いが交錯して今に至る…
その名は、守原鋭太…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5208v/

ゲッターロボΩ

2011年10月9日01時41分発行